

憲法9条と私 9



へんなものでもいいものはいいのだ

春本幸子

私の原体験—戦争の被害者として

私は昭和ヒト桁生まれ、国民学校（今の小学校）6年生で8月15日を迎えた。だから第二次世界大戦の戦中・戦後の、真ただ中で生きたという原体験を持っている。

神戸で生まれ育った。父は神戸市の職員、母は和裁の教師という家庭の長女で、主に祖母に育てられた。父がハンサムなモダンボーイだった。父と祖母が親子でずぶずぶの溺愛をしてくれたので、昭和初期のロマンの薫りを満喫しながら心地よい少女時代を送っていた。

ところが、国民学校に入る前頃から、周囲が騒がしさを加速した。子ども心にも、何かただならぬ異変が起きているのが感じられた。国民学校2年生の12月8日に運動場に集められた私たちは、日米開戦を告げられた。それからは軍国教育を強いられるうちに、戦況が厳しくなり、上級生になるころは毎日のように空襲警報のサイレンが鳴り響いていた。

5年生の終わりから6年生の夏まで、私は度重なる空襲を経験しなければならなかった。とくに3月17日夜には神戸大空襲があり、一家で橋の下へ避難したものの、すぐ目の前をB29爆撃機から投下された焼夷弾が降り注いで発火するのを見て震えていた。とにかく恐くて神に命だけは助けてくださいと必死に祈っていた。「私だけは」というのが救いがたいところである。あの時は自分が生命を保証されるなら、人殺しも辞さなかったであろう。

明けて神戸は焦土と化し、黒こげの死体がくすぶっていた。恐かった。この空襲の怖ろしさは今でも時折夢に現れる。その生々しさは60年の星霜を経てなお鮮烈である。

これが戦争の実態である。

どんなに美辞麗句を連ねても、恐怖に支配される人の精神の荒廃は隠すことができないのだ。その後、幾たびも空襲に追われ、生きた心地もない日々であった。

何やらよく聞き取れなかった敗戦の玉音放送を聞いたときの、助かったのだという安堵感はこちらも鮮明に蘇る。

加害者としての戦後

私は戦中 恐怖に晒されながらも、戦争を米英の侵略からアジアを解放する聖戦と信じて疑わなかった。戦中は本音を語る大人たちを監視していたふしがある。敗戦直後、「大東亜共栄圏」の欺瞞のからくりを知るに及んで、アジアの人々に申し訳ないと思った。

その罪を償うために、何ができるだろうか。

旅の途中ソウルへ立ち寄った時、空港で私がまず行ったことは、滑走路に向かって土下座す

ることだった。まわりの人々は何をやっているんだろうと、いぶかしげな視線を送ってきたが、だれにどう思われようと私はそうせずにいられなかったのだ。

個人の力には限りがあるが、日本へ来た方々にできるだけ、家へ泊まっていたらいてお詫びを言う機会を作ろうと思った。夫も同じ考えであり、語学が達者だった彼は、喜んで行動してくれた。副産物は子どもの海外留学であった。

私たちの謝罪を受けた方々は皆、私が小学生であったし、夫はまだ生まれていなかったのだから、罪は犯していないと言って許してくれた。しかし、当時は小学生といえども成熟していた。小学校を出ると就職か、恵まれたものは受験が待っていた時代である。加えて生命の危機に晒されていたから、現在の少年少女とは比べものにならないくらい早熟だった。その頭で考えれば解ることだったのである。私と同年輩のある学者が、小学高学年の時、大東亜共栄圏などという構想にうさん臭さをかぎとり、沈黙で抗議したと語っていた。私は思いきりバカであったのだ。個人が子どもだから、あるいは生まれていなかったから許される性格のものではない。戦争を起こした民としての未来永劫償わねばならないものがある。現にドイツの民はそうしているではないか。

人間として持つ原罪と、国民として犯した罪をキリスト教に帰依して、赦しと償いを願っているが、神が赦すと言われても、人からは赦されないだろう。

侵略とくすり

ここで少し薬害と侵略の関係に眼を転じたい。

薬害が戦争と関係あるなんてと思われるかもしれないが、薬害は戦争と二人三脚でその歴史を刻んできた。

私たちの罹患したスモン（キノホルム薬禍）を、その例に挙げよう。

1820年にキニーネが抽出されてから、その強い神経毒性が注目され、さらにキニーネの薬効を持ったキノリン化合物の合成が競われるようになり、1899年スイスのバーゼル化学工業が開発、翌年「5-クロロ-7-ヨード-8-ヒドロキシキノリン」（キノホルム）を販売開始した。

折しも西欧の列強は、植民地の感染症マラリヤやアメーバ赤痢に悩まされていた。これらの特効薬としてキノホルムが外用薬から内服用に開発され、植民地侵略の一端を担うことになった。

日本では1913年武田長兵衛商店（現武田薬品）と三共株式会社（現三共製薬）が販売していたが、その2年後陸軍が試製を始めた。第2次世界大戦で戦線が、中国、南方とアジア中に拡大する中で、欠かせない薬として常に軍の行くところにあつたのである。

戦後は国民皆保険に乗って、キノホルム剤の使用が拡大され、未曾有の薬害といわれたスモンが発生したのであるが、その使われ方は、「オリンピックの競技上の予防衛生（埼玉線戸田市）」「皇太子の行幸（岡山県湯原市）」などに見られるように、お上が権威擁護を図る戦前の延長線上にあるような使用ぶりである。

この例のように、戦争や権力と切っても切ることのできない薬剤開発の歴史があるのを私た

ちは見ることができる。

世界の信用

私はそんなに多くの国に行ったことはないのだが、私の知る限りでは9条が、海外での日本のお守りになっていると思う。

日本人が、日本製の車が世界中を走り、経済アニマルと鬻蹙を買いながらも世界中のどこの国にも比較的簡単に住み着くことができるのは、日本人が戦争を嫌い、平和を愛しているからであると私は思う。その証明が「9条」だ。しかも戦後、60年の長きにわたって変えることをしなかった、この事実である。

確かに「9条」は、世界の常識に照らせばヘンな条文であると思う。

そういえば憲法自体にヘンな箇所が散見される。法律にうとい私でさえ「象徴」などという文言には、首をかしげずにいられない。

敗戦当時、日本国民には自らの意思を結集する自由がなく、戦勝国から押しつけられた憲法だから、早く改正するに越したことはないという人々が多数になってきた。しかしあの時、精一杯生きていた日本国民の、「9条」あれはまさに総意だったのではないだろうか。私にはあの頃の感動が胸の内にまざまざと蘇る。

改正論者に訴えたい。

敗戦を知らない人々にも訴えたい。

あなた方が見て、ヘンだと思われるようなものでも、誇りとなるものはあるのだということ。ヘンなものでもいいものはいいのだ。

世界の国々にマネしていただきたい。

本稿を書き終えた翌日、昨年韓国人牧師と結婚した日本人女性牧師のご夫婦に、私の所属する教会で語り合う機会が与えられた。その内容だけで1冊の書物ができるのではないかというほど、濃いものであった。報告するには紙面が足りないので省くが、一同の胸に去来したことは、戦後の日本の繁栄が、まず朝鮮戦争、ついでベトナム戦争というアジアの犠牲において成り立っていることを忘れてはならないということであったと思う。韓国の人々は、本来、第二次大戦後分割占領の運命にあった日本の身代わりになっているという感覚を持っているという。かの国の民衆の痛みが突き刺さる感じであった。

正しい歴史認識を持つことが、キリスト者として生きる上で重要であることを、改めて認識した。

(はるもと・さちこ 医療ソーシャルワーカー／兵庫県スモンの会)